

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 11 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381023

研究課題名(和文) 思考力・判断力・表現力を育成する対話活動における「聞く」意味に関する実証的研究

研究課題名(英文) An empirical study on the importance of "listening" in interactive activities for developing thinking, decision making, and expression skills

研究代表者

木下 百合子 (KINOSHITA, Yuriko)

大阪教育大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：10169914

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、授業で教師や級友の話を聞くことが、生徒の思考力・判断力・表現力の形成に与える影響を明らかにし、その成果に基づいて、生徒の「思考力・判断力・表現力」の育成をめざす授業構成を提案することを目的としている。授業のプロトコール分析の結果、対話過程における思考の内容と深まりは、話し合いの課題のタイプ、ならびに教師による話し合いの過程の指導によっていることが明らかになった。この成果を基にして、話し合いを中心とした授業構成と話し合いの過程の指導の重点について提案した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to determine how listening to teachers or classmates speak during class influences the development of students' thinking, decision-making, and expression skills, and to apply those findings to propose a class format that aims to develop those skills. Protocol analysis of classes revealed that students' thoughts during the interactive process and the depth of those thoughts depended on the theme of the discussion and teachers' guidance of students in the discussion process. These findings indicate that the class format should focus on discussions and that teachers should guide students in the discussion process.

研究分野：社会科学

キーワード：教授対話 コミュニケーション 協同 思考力 表現力 判断力 グループ学習

1. 研究開始当初の背景

(1) 現行の学習指導要領では、全教育課程で言語活動を重視し、「子どもの思考力・判断力・表現力」を育てることを目標としている。そこから、「話し合いのある授業」の構成と指導へのニーズが高まっている。

(2) コミュニケーション研究において、コミュニケーションは、一定の社会的条件のもとでの間人間的関係の中で生じる事象であり、「話し手 テキスト 聞き手」の3項からなりたちテキストの意味づけをめぐって生じる、という共通理解に到達している。

授業における話し合いも同様で、一定の社会的条件のもとで生活する教師と生徒の間人間的関係のもとで、授業の目標と関連した課題について生じる。

(3) ことばと考えること、ことばと話すことの関係から、話し合い活動をとおして児童・生徒の思考力・判断力・表現力が育成されることは理論的・経験的に明らかになっている。

2. 研究の目的

(1) 授業の話し合い過程において、児童・生徒が教師や級友の話を聞くことが児童・生徒の思考力・判断力・表現力の形成に与える影響を明らかにする。

(2) 明らかになったことをふまえて、児童・生徒の「思考力・判断力・表現力」の育成をめざす話し合いのある授業構成のポイントとその指導の重点を提案する。

3. 研究の方法

(1) 話し合いのある授業を志している教師による小・中学校の社会科授業を参観し、ビデオとプロトコールを作成し、話し合いの過程を、テーマとの関連で、テーマと話し合いの内容との関連で、テーマと思考活動との関連で、分析する。

(2) 分析した成果にもとづいて、思考力を育成するのに効果的な授業構成と話し合い過程の指導のあり方を考える。

4. 研究成果

(1) 話し合い活動に関する理論的成果
2013年9月に、ライプチヒ大学(ドイツ)を訪問し、コミュニケーション研究に関する博士論文を閲覧した。そのさい研究交流のためのペーパー“Characteristics of Speech as the Entirety of Language Used in Interaction”(「授業で使用されることばの総体としての教授言語の特質」)を作成した。また研究交流の継続として論文“Indicators for Using Language Effectively in the Classroom”(「授業でことばを効果的に使うための標識」)を作成した。

2015年10月には、オーデンセ(デンマー

ク)で開催された協同教育国際学会の会議に参加し、生徒のワークと話し合いを中心にした諸外国の授業例を知り、本研究の仮説の意義と実証的研究の必要性を確認できた。

(2) プロトコール分析から導き出された質問・課題タイプ

授業での話し合い活動は、話し合いのテーマと関連しているという理論的仮説に基づいて、観察した授業で設定された質問・課題を分析し、次の5つのタイプに分類できた。

知識や経験を確認する質問・課題

授業に興味・関心を持たせるための質問・課題

資料を基にして調べて分かったことを発表しあう質問・課題

正解のない社会的課題について考える質問・課題

問題的 発見的な性格を持つ質問・課題

(3) 5つの質問・課題タイプとそこでの話し合いの内容

知識や経験を確認する質問・課題

・中学校1年 世界の気候について気候区分を教えてください

生徒はこの質問に対して、熱帯、温帯、などと答える。この質問は、生徒の知識の確認のために必要である。しかし、ここでは話し合いは求められない。

事例1

・小学校5年 「自動車工場ごっこ」を振り返って、工夫したことや困ったことを紹介してください

児童1:僕は、値下げをして売り込んでいったけれど、値下げをするとあそこより安いということで、たくさんの方が買ってくれる。

児童2:つけたしです。値下げをしすぎても自分の利益にならないから、そのあたりを自分たちで考えてしたのがよかったです。

児童3:僕は、児童1と児童2のつけたしです。値段を高くしてちょっとだけ売ると値段を安くしていっぱい売るとでは、結局もうかるのは一緒だったから、安くしたほうが効率よく売ることができました。

(中略)

児童4:値段を安くするとたくさん買ってくれるけれど、安くしすぎて、自分にはあんまりお金が入ってこない時もあるので、その時は、今だけ10万円とか、あ、今買っといたほうがいいのかと相手に思わせておいて、いっぱい買ってもらうのがうまくいった。

経験の確認は、知識の確認とは異なって、正解がないで、多様な交流が可能である。

授業に興味・関心を持たせるための質問・課題

事例2

・中学校2年 1620年、イギリスからアメリカへ102人行きました。その102人のうち、約38人です。何が38人なのでしょう?

この質問の後、教師は先住民がイギリス人

にトウモロコシが食べられることを教えてくれたので、38人は生き延びることができたことを説明する。そして本時の課題として「では、イギリス人は先住民に何をしていたのでしょうか」を設定する。授業の最後に、「イギリス人はアメリカで何をしたか」について、生徒は10分間で書いてまとめる。そして次時に生徒の書いた内容が発表される。ここでは、発表する前に書く作業が取り入れられる。

資料を基にして調べて分かったことを発表しあう課題

事例3

・中学校2年 四国と本州が道路・鉄道でつながって、人々の生活にどんな変化がでたでしょう。

生徒1:列車や車のほうが早くて安いから、客が来なくなって、フェリーの船員の仕事がなくなりました。

教師:根拠になる資料は何番ですか

生徒1:6番です。列車や車のほうが早い。それに電車が、もっとも早くてもっとも安い。

生徒2:瀬戸大橋や明石大橋ができて、時間が早く、また安く行き来できるようになって、フェリーが廃止になりました。

ここでは、根拠となる資料を基に発言されていることがわかる。

正解のない社会的課題について考える質問・課題

・神戸空港をどのように改善しますか

・緑陰道路を今後どのようにしていくのが良いですか。

事例4

・中学校2年 EUで暮らす人は、どうすればもっと豊かに暮らせますか

生徒1:国の権限を尊重する

生徒2:貿易や人の移動はいいけれど、法律とかはその国で決める。

生徒3:僕は反対意見で、EUという、何か中途半端すぎて、国ごとに物価がそろっていないとか、自分たちの国がEUから受ける恩恵は、ほかの国に比べて少ないのではないかという不安や不満が今もくすぶり続けているということから考えて、一つの国にしたほうがよい。

生徒4:EUを一つの国にしても、恩恵を受けるところはすごくいいけれど、この地域はそんなに恩恵を受けていないとかあるので、不安や不満はそんなにかわらない。

生徒5:国をEUに合体したところで、発展しているところと発展していないところがあるから、発展していないほうへ援助が行くから、合体しても不満は変わらない。

生徒6:EUがもし一つの国になったら、それぞれの国の人々の誇りとか、意見とかがなくなって、たぶんそれぞれの現地の人が一つになることを許さないと思う。

生徒7:あくまでEU内では、物の移動とかは管理するけれど、国の権限とか、国の制度で決めるべきことはEUに渡さない。法律を

決めたり、政府の移行とか、そういうのは国が決めないと、EUが一つの国みたいになってしまう。

問題的 発見的な性格をもつ課題

事例5

・中学校3年 公正な税制を考えよう。完全平等課税、定額課税、定率課税、累進課税の四つで、実際に計算をして、考えてみよう。もっとも公正だと思う課税法を選び、理由を述べてください。

生徒1:僕は定額課税のほうがいいな。人の2倍働いているのだから、収入に関係なく他の人と同じ定額でいい。

生徒2:定額課税だと、税の額は一緒だけど、手もとに残るお金が違うから、平等じゃない。教師:では、定率課税は平等ですか。

生徒3:収入が少ないからといって払う税金が少ないのはおかしい。収入の多い人が反対しそうです。

課題が生徒にとって難しかったのか、生徒だけでの話し合いは進展せず、教師の説明が多くなる結果となった。

(4)「話す 聞く 話す」関係の6つのグループ

上記(3)であげた5つの質問・課題タイプでの話し合いにおいて、「話す 聞く 話す」の関係は、次の6つのグループに分類できた。

級友の発言を聞いて同意を表現する

事例1の「自動車工場ごっこ」の経験交流において、児童2,3は児童1への付けたしとして、「安くしてたくさん売る」ことに同意して、それぞれの工夫を表現している。

また、事例2のEUをめぐる話し合いで、生徒1,2は、異なった表現で、それぞれの国の権限を尊重することに同意を示している。

級友の発言に対して、意見の違いを表現する

事例2のEUをめぐる話し合いで、生徒1,2の発言に対して、生徒3は、EUを一つの国にしたほうがよいとして、明確に意見の相違を表現している。

級友の発言について、受け入れられることと、受け入れられないことを表現する

事例1において、児童4は、児童1,2,3の「値段を安くして売る」ことに同意を示しながら、安くしすぎることに対して、「時間を決めて安くするとうまくいった」と自分の工夫を述べている。

級友の発言を受け入れる方向で考え、さらに深めて表現する

事例4で、生徒4は、生徒3のEUを一つにしたほうが良いという考えを受け入れて一つにした場合を想定して、しかし、やはり恩恵を受けるところと受けないところがあるので、不平や不満はそんなに変わらないとして、受け入れられないことを表現している。

話し合いの過程で理解できたことを、要約して表現する

事例4で、生徒5は、生徒4の意見を一般化して、援助は発展している地域から発展していない地域に向かうので、合体しても不満は変わらないと結論付けている。

また生徒7は、生徒6の経済的視点からの意見とは異なった意見も含めて、この話し合いを要約して発言している。

話し合いの過程でまだ表現されていない異なった視点から表現する

事例4で、生徒6は、EUの一体化がもたらす恩恵について、経済的視点から話し合われていることにたいして、「それぞれの国の人々の誇り」という異なった視点から意見を述べ、話し合いの視野を広げている。

「話す 聞く 話す」関係は、以上のように6つのタイプに分類できる。ではそこで児童・生徒はどのような思考活動をしているのか。

(5) 質問・課題のタイプとそこで求められる思考活動のタイプの関連

解釈することを求める質問・課題

事例2の質問「では、イギリス人は先住民に何をしてあげたのでしょうか」は、授業に興味を持たせるために、授業の最初でなされると同時に、授業の最後にこの質問について生徒が理解したことが書かれ、次時にすべての生徒の書いたことが発表される。ここで発表される生徒個人々の考えは、授業で学んで、生徒が解釈した内容である。この解釈する課題では、教師によって話されたことからさらに継続する洞察を発見し、説明し、整理することが重要になる。

推論することを求める質問・課題

事例3の話し合いでは、資料3から導き出される事実(列車や車のほうがフェリーよりも早い)から、フェリーの数が少なくなった、そしてフェリーの船員の仕事がなくなったことを推論し、証明している。また事例4では、EUについて学んだ知識を活用して、EUの統一を強化するほうが豊かになるのか、EUの強化には問題があるのかを話し合い、根拠づけて推論している。

このような一貫した思考から一定の認識がもたらされるときに、その認識は、証明されたものとして確信力を持つ。

証明することを求める質問・課題

正解のない課題、例えば先に挙げた「神戸空港をどのように改善しますか」は、「神戸空港は廃止する」という考えに対する反論として、改善策を考える課題である。生徒は、適切なデータを収集し、解釈し、可能な改善策を主張する。

証明する話し合いでは、生徒は適切なデータを用いて、自分の主張を証明することになる。で挙げた、順々に推論し、結論をだす思考とは、逆の思考となる。

問題的 発見的な性格を持つ質問・課題

事例5は、問題的 発見的な性格を持つ課題であるが、どの課税法が公平かを十分に話

し合うことはできず、教師の捕捉質問をはさみながら、授業は進行した。

問題的 発見的な性格を持つ質問・課題は、ディスカッションを求めるが、本研究の過程で参観した授業では、ディスカッションが組織された授業はなかった。

(6) 授業における質問・課題設定の改善

対話力・思考力を高めるためには、一問一答式の質問は最小限にとどめ、設定される質問・課題について、次の点での熟慮が必要である。

育てたい思考方法を求める質問・課題を設定する必要がある。

授業でディスカッションを組織する余地が残されている。

(7) 授業における話し合い過程の指導の改善

児童・生徒の話し合いの過程は、教師の対応によっても異なる。児童・生徒の話し合いが活発になるためには、児童・生徒が教師に向けてだけでなく、級友に向けて話し、級友の話を聞くように励ます必要がある。そのためには、

児童・生徒の発言の正誤評価を控える、
教師による反復をさける、

少数の児童・生徒とだけ応答しない、
ことが必要である。

(8) 得られた成果と今後の展望

授業における話し合い活動で、教師や級友の話を聞いて、聞いた内容に関連付けて話す過程を分析し、そこでの思考活動を明示できた。そして思考活動を促進するためには、求める思考活動にふさわしい質問・課題を設定し、話し合いの過程を適切に指導する必要があることを明らかにし、質問・課題設定の改善と、話し合い過程の指導の改善を提案した。

本研究をとおして、聞くことと話すことと思考の関係とならんで、聞くことと書くことと思考の関係もまた、重要な分析の対象であることが明らかになった

なお、本報告において、授業プロトコルの使用に関して、個人情報保護の観点から、学校名ならびに教師名と生徒名は記載していない。

5. 主な発表論文等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木下百合子 (KINOSHITA YURIKO)

大阪教育大学名誉教授

研究者番号：10169914